

江戸版浮世草子『蜜漬の一曲（みつ漬の人和氣）』（巻上・中）
― 翻刻と解題 ―

藤原英城

はじめに

本稿は貞享・元禄初期に刊行されたと推定される江戸版の浮世草子『蜜漬の一曲（みつ漬の人和氣）』巻上・中の翻刻と解題である。

〔書誌〕

蜜漬の一曲 刊本 半紙本 二巻二冊（巻下欠）

巻上一冊（名古屋市蓬左文庫蔵）

巻中一冊（京大文学研究科蔵）

表紙 巻上 朽葉色無地原表紙（ほぼ剥落）。縦二二・三糎横

一五・九糎。

巻中 黄土色無地改装表紙。縦二二・五糎横一五・九糎。

本文 四周単辺。縦一七・二糎横二二・六糎。半丁七行毎行一五字

前後（序は半丁六行毎行一〇字前後）。

構成 巻上 一五丁（序半丁「一（オ）」、目録半丁「一（ウ）」、

本文一三丁半「二〇十五（オ）」、余白半丁「十五（ウ）」。

挿絵 巻上 見開三面「四ウ・五オ、九ウ・十オ、十二ウ・十三

オ」。

巻中 一二丁（目録半丁「一（オ）」、本文一二丁半「一（ウ）」十二」。

「四ウ・五オ」に丹・緑・黄・青・茶色、「九ウ・十オ」に青色の彩色が施されている。

巻中 見開三面「四ウ・五オ、七ウ・八オ、十一ウ・十オ」。

巻上 後題簽書外題「蜜漬の一曲 上」。巻中はなし。

序題 題なし。ただし、序文中に「蜜漬の一曲と号して」とある。

目録題 巻上はなし。巻中「みつ漬の人和氣 中」。

内題 題なし。

尾題 巻上「密告の人和氣上終」、巻中「蜜漬の人和氣中終」。

板心 「蜜上（中） 丁付」。ただし、巻上「九〇十一、十三〇

十五」、巻中「一〇六、八〇十二」の丁では版心の天地の匡

郭が欠如している。

句読 なし。

作者 未詳（「解題」参照）。

画者 未詳（菱川師宣風）。

刊記 未詳。ただし、貞享・元禄の初め頃刊か（〔解題〕参照）。

諸本 卷上 名古屋蓬左文庫（尾崎久弥コレクション）蔵本

（尾8・16）。

卷中 京都大学大学院文学研究科蔵本（国文学／Pe／84）。『国書総目録』未収。

備考 ・卷上は尾崎久弥氏（『江戸小説研究』弘道閣、昭和一〇年三月）による翻刻が備わるが、挿絵は「九ウ・十オ」の見開一面のみ掲出されている。

・卷中の表表紙見返に次の墨筆書き入れが貼付されている。

此書中卷なるため著者及刊年も未詳 然れども挿画を見れば『元禄』頃の版行と思はる 又目録の初めに『みつ漬の人和氣』とあれどもとの標題は他にあるならんか

・野間光辰氏『初期浮世草子年表』（青裳堂書店、昭59）には、「中巻一冊のみ一見」として「みつ漬の人和氣」の書名で元禄年間の刊行書の中に記載されている。

余説 柳亭種彦の手記とされる『好色本目録』には作者を「一慰軒」とするなど、本書に関する記事が見られるが、種彦

披見本と本稿底本との関係は不明である（〔解題〕参照）。

〔梗概〕

本書は『浮世草子大事典』（笠間書院、平29）には未収録のため、以下に簡単な梗概を記す。

（卷上）七夕の夜、江戸の人々が遊山船に興じる頃、語り手は花火見物もよからうと両国橋の辺りに船を出すと、白い吹き流しの女船と赤い吹き流しの男船がしずかに出会う。男船には座頭に按摩をとらせる若衆、女船には一五、六歳の娘とその母親、その他両船には腰元たちが乗船している。女船より声をかけ、座頭が若衆と娘を取り持つ。両船は酒機嫌となり、若衆は三味線、娘は琴、座頭は尺八を奏し、腰元たちも踊り歌い、陸の観客や辺りの遊山船もこの踊り船に興じる。夜も更けて遊山客が帰路に就く中、両船は静かに曉まで酒宴を続け、人々是不審がる。語り手は座頭と知り合いで、その事情を後日尋ねると、若衆と娘はそれぞれ武家の二男と一人娘で許嫁の仲であるが、輿入れがまだ叶わない娘は恋煩いとなり、娘の姥から相談を持ち掛けられた座頭が一計を案じ、舟遊山にかこつけた密会を催したものであったことが明かされる。

（卷中）市谷の辺りに住む奥田某は五〇歳を過ぎるも夫婦に子がなく、男子が授かるようにと浅草観音に参籠していた六月十八日の夜、女房は夢の中で、月が割れてその片輪が胎内へ入るのを見て懐妊する。女房は女子を出産し、娘は桂の姫と名付けられて美しく成長するが、一五歳の一〇月に俄に懐妊する。お側仕えの女房たちには心当たりもなく、奥田は娘の姥に事情を問わせたところ、娘が答えるには、去年の八月一七日の月見の夜、一七、八歳の美麗の若衆が夢に現れ閨を訪れて以来、毎夜夢路を通い続けること二年、契りが重なり今日に至るとの返事。夫婦は娘の狂言と怒るも、牛王の誓文を立てる娘を信じてお産に備え、八月十八日の曙に無事出産する。しかし、生れ出たのは

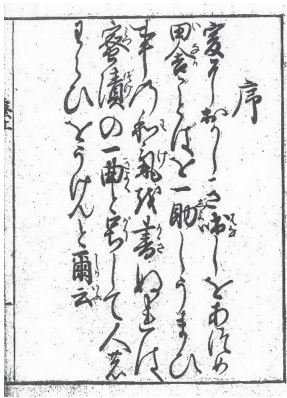
人ではなく、手毬ほどの大きさをした卵が三つであつた。それらの卵を桂卵と名付け、それぞれ重宝として深く納めたところ、この娘はその後高貴の方に召され、桂の前と呼ばれて寵愛を受けたということである。

〔翻刻〕

一、翻刻にあたっては、原則として現行通用の字体に改めた。ただし、当時慣用と思われる漢字表記などについては、そのままの残したものである。

一、丁移りは、丁付と表・裏（オ・ウ）を括弧に入れて示した。

一、既に備わる翻刻（備考参照）との異同箇所には＊を付した。



序

爰におかしき咄しをあつめ

田舎ことばを一助しうまひ

事の和氣を書ぬれば

蜜漬の一曲と号して人の

わらひをうけんと爾云

（二オ）

第一 遊山は恋に寄飾舟

付置合は有物かは

第二 爰に弥増の薫有

付聞惜き態々

第三 花火はむたに腹立男

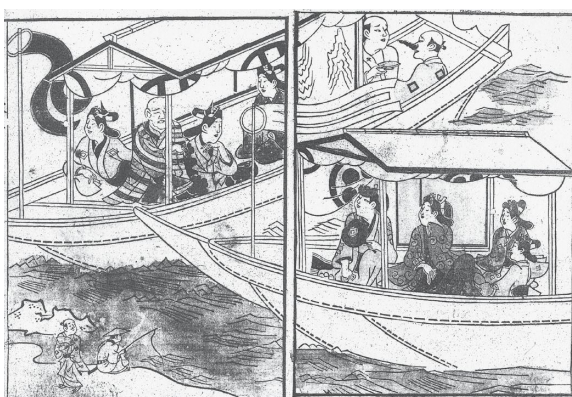
付賢きは物の上戸（二ウ）

物の悲しき夕まくれ川霧たちのぼりてもみちも見えわかぬころ立出たるこそ心地よけれ爰に初秋の七日は牽牛織女のかきりなくおもはれるよとてとりわけ人の心さうかはしく貫之か古きことはにも織女にぬぎてかし（二オ）つる唐衣いと、涙に袖やぬるらんと口ずさみし事ともおもひ出ればもの、あやまさりけり中にも遊山舟多し爰かしのよるくくに船もつなきおもひくの酒盛なとしまことに与所気なく見ゆれば我も小舟に棹さして酒樽のだし（二ウ）口もしつかと夜の花火もよからんと両国橋へ心ざすあとさきに成て行船有みればかざりもさらなり船ちいさからぬに羅漢の数ほと覺しくてやんことなき若原の座頭にあんまをとらせ腰本に団をさせてそろく舟をおさせ橋より二町ほと（三オ）をきてかゝる爰にまた川上よりしきりに櫓声聞へて是も同じ比をいの舟の幕なんと見事に目はしくほと白き吹なかしを印に立たるか声も絶るほとをして下る其時若原の船に赤きふきながしの同しほとなるを立たるを見て（三ウ）ろごへをやめてしづかに梶を取今のふねより弓杖三つほと置てつなくみな人不審き事におもひ船とも

あつまりまことに舟橋のことくにて川もせまくなりぬ然とも二艘ふねなから何の興きもなくしづまりて音もなししばらく有て赤き船にこしもと（四オ）

挿絵第一図（四ウ）

挿絵第二図（五オ）



第一図

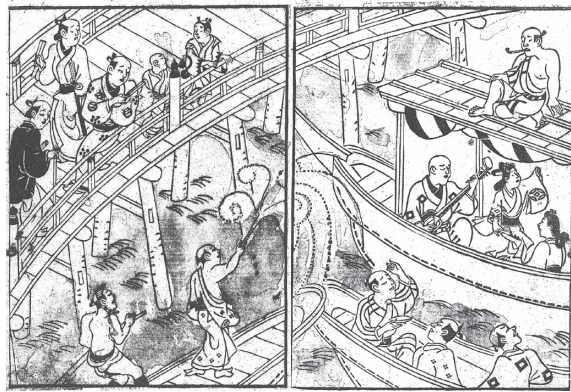
第二図

銚子ちうしもちて座頭も一二のみ
たるかと覺てうき世のはな
しわらひ声そろく聞へけれ
とおもしろからず人もせん
き見物かないざのめやうたへ
とさ、めきし所に白き舟の四
方の幕まくをしほりたるにそ異
香薰きやうくんじ絶がたき匂ひくれは
年のほと（五ウ）十五か六か
誠に多ならぬ御粧よそはい下には白
きかたひらす、しのひとへは
糸す、きいつか穂ほに出てみだ
れあふ月のいるさも山の端はに
かゝるたよりをくれ竹のふし／＼こめしわかおもひ君はしらすや白浪なみ
にこかれ／＼てしのひ草むすひて掛し舟霊ふねたまといとは五色にぬいみだし
たるを（六オ）上にめしたけにあまれる黒髪は一ふしならぬ入かもし
結びすましたる御よそほひきりつほは、木々須磨あかし女三みやの宮みやの立
すかた小野小町をのと申とも是にはいかてまさるへし次に男の厄年やくどほとお

ぼしき仕なしたる女と十二三計成こしもとはかりにていとさひしく見
るさへはつかしや（六ウ）暫しばらくありてしなし女船はたに出赤きふねに
申けるはちかころの申事にて候へとも分て不楽敷なぐ永あそひ与所の見る
目も候へは御船に並ならへたと申其時座頭居いなをり御心に入たる事近比ちかごろ
よろこひ入て候何かくるしう候へしはや／＼是へと云ければ嬉しげに
船を付てやがて何やらもたせ（七オ）御船にうつりさりとは座頭さま
の御情なまけかたしけなや是にめつらしからぬ酒をもたせて候へは御なく
さみにきこしめせとはゞからす取出し品々折につみてさし置さかづき
をみたし小人にもす、めければ座頭も機嫌きげんよく女も色づきてたわむれ
の物語をしけるか座頭申けるは上郎の御船はひとり召（七ウ）たまふ
か女房はうされはこそ娘をのせて候へとも内気者にてなか／＼残しおきて
と申是これどうよくのか、さま哉やせめて御酒でもあげ給へひらにこな
たへといへはさらはとてまねくお姫はいと、あたはゆくとらぬさか月
に秋の来て良にもみちをなかししとけなく成て舟へうつりけるにそい
よ（八オ）玉散ほとに見へけり座頭も取あへすあいさつしか、さまの
御盃みづ一つまいりませとてもらせこなたへもくたされおあひて若やき
申へきなときやうけんしさかつきを取あけるかいや爰はまた目くら
ものに御めんあれとてお若原へさし出す小人は見しよりたへ／＼に成
心君の船に有けるが（八ウ）今はとる手計のおもはくになりて座頭は
通りものかなとうれしく心の花をひらかせ一つのみてはつかしなから
姫へさし給へは是も情は同じ道からくれなゐの色ふかき心はたかひに
かよひけり夫より次第そで／＼に小車くるまのめぐる盃さ数かずそいて座頭三味線さんみせんを
出しはやり哥一二うたひければ二人の腰本こしもと（九オ）

挿絵第三図（九ウ）

挿絵第四図（十オ）



第三図

第四図

りて座頭は尺八を吹て三つの拍子を合せけるにそおもしろくたへかねて船は舷を叩き陸はあふきを打て女は人目も恥ず出家も僧道をわすれておもはす感しける声暫はなりもやまずしらぬ与所には事のおこりたるよと足を空になす（十一オ）誠に希代なる遊山治世に覚たる人もなし其夜花火も殊巧にて三四出しけれど五つや六子より外見る人もなく此男腹たちてかゝるはちのさし合かな是ほとの見物をむたになしつる事の口をしやとつふやきて持てかえりぬやうく夜もふけ行はいつとてもあかぬは今宵成へし名残をしけに人々は（十一ウ）帰り船

かりやうひんがの声音にておもしろきふしをうたひをどり歌になし拍子を入て扇子をひらき二人なら立ければあたりの舟とも一度にこゑを出しほめしにそ弥拍子も揃おもしろき事限なし其夜は月も相生の光りをましてかゝやは殊に稀成舟遊ひと人の船も事を止てなめくらしかえりはを（十ウ）わすれけり若原は三味線をひきお姫は琴を弾たまへはいと、爪音かわ

とも、筋々にもとりければかの船もほとんど拍子をやめてしつほりと酒盛になして其後は何としたやらあかつきにかえりしとなりみな人審しけれと屋敷もしれす我此座頭をしれりゆきて尋ければされは沙汰なしの事此姫はさるお侍の独姫又若原も同じ位の御二男なり此姫の親仁に（十二オ）

挿絵第五図（十二ウ）

挿絵第六図（十三オ）



第五図

第六図

たならてはたのむかたなし折ふしきさまには分ての御念比心やすき御出入なれば何とそ逢給ふ事をひとへに頼と打くどき申ければせんかたなくてたのまれ久しく愚案をめぐらし漸ちかき比此事をおもひ付小人に行て舟遊山の事をさまくす、め御なくさみには此中舞子の弟子の候を御船にのせ申へし（十四オ）またさるかたに琴の弟子の候

御息なきによりかの小人を養子にし姫と婚べしと約して過つる夏初披露もすみけれとたかひに年若ければとて今までは本の親仁さまの所に居て節々の勤まてなりしかるを姫物すきに見しよりあさからず恋わびおもひの床にふしづみ給ひければ姥我にかたりてかやうくの御事何と心を（十三ウ）くだけど別にそな

折ふし同じ日にまいり度と申これをもよふし候へしことも上手にてきりやうは人にすぐれ候へはよき御盃の友と申合て其日をさため二人の舞子を両方のこしもとへ出しうはと申あわせてわざと人にはしらぬ船になしてかくとりあそびあわせましたなり此事かまいて（十四ウ）人にかたりたまふなとうまいことを咄したるなり

密告の人和氣上終（十五オ）

〔余白〕（十五ウ）

みつ漬の人和氣 中

第一 新成哉観音の告

付物の種は違物かは

第二 月は隈もなき比

付不思議の契

第三 産屋に興醒て

付夢 通路桂卵の沙汰（二オ）

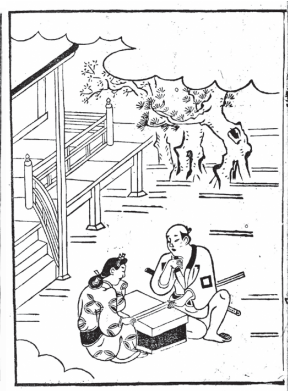
市谷の辺に奥田のなにかしとていやしからぬ人有若き時より公用にひまなく遠近の国々に凡近付ならぬ所はなし家も富栄へ事に不足なけれと子の縁うすく五十に余て夫婦稼のかひもなし有時打なげき仏神に祈誠し殊更浅草の観音は利生他にこへ給へは（一ウ）男子をさづけ給へと初の比は月まいりをしけるか後には十七夜ことに通夜しける

殊に六月十八日は中にも功德ある日なれば夫婦参籠し終夜誦経なとして懇にいのりけるが八つの時分か女房しきりに眠つき少まろみし内に其夜の月一しほか、やきたるか中より破て片輪胎中へ（二オ）入と見て夢さめぬ女房おとろき子細をかたる奥田よろこひこは有かたき夢の告まことに観音の御利益願は成就したりと夫婦もろ共に礼拝し静に下々しまわせて悦び帰りける果してほとなく懷妊ありければ一門眷属をあつめて悦事はかぎりなし御産の月に成ければ今やおそしと（二ウ）まちけるに別て輒く産声聞へていつれもよろこひいわぬ男に産問させければ目出度お姫様と申奥田手を打扱も望は違たりしかれ共末繁昌の姫いよくめてたしと悦の盃を廻し月を見たるなればとてかつら男をなぞらへて桂の姫と名を付おちやめのとほ数割て夫婦寵愛かきりなし月日に（三オ）関守すへされは程なくはや十五歳に成給ふひすいのかんさし青ふして丹花の唇うるはしく芙蓉の眸たをやかに百の媚有御かほはせ立出たまふそのふせい遠山に浪を敷弓はり月のいるかたもなきおもはくはいかなる窟の聖成共還俗の種ぞかし常に名香歌合中にも琴は（三ウ）上手にて花によせ月にうそむき小町式部かあとを追はるの長閑き日はかすみたなひきたまがきも見えはかぬ程花見の車桜がり東叡山の木陰に身をやつして花はさかりをのみ夏の冷しき夕暮は隅田川に小船をうかへ往昔の都人におもひはわれも業平のゆかりの色をうつし絵に（四オ）

挿絵第七図（四ウ）

挿絵第八図（五オ）

心まどひし秋来ては下屋しきに月見の亭を飾さらしな武蔵野の景を



第七図



第八図

うつ 移し萩萩小花色つきて泉水の
やり水も涼しく月は心をのみ
なかくてもみちをおもしろく
夜もすから酒盛などし玄冬素
雪のさむきあしたは北窓をさ
し火桶も火かげんをよくふす
まをかさね物こしの (五ウ)
風もいやなそのとしもたち又
春にうつりて夏すぎあきも来
て遊の色品をかへうき世に有
し事ともみなしつくして心の
たくみに成物ずき風流とも誠
にことはもおよひかたし日去
り
月来て神無月の比御姫こゝろくるしみなやみたまふ親たちおどろき
医師を呼て見せ給ふに (六オ) ふしぎさよ御懷妊の事と申奥田大
きに赤面しさりとは口をしき次第いかさましさいの有へし先此事は御
沙汰なしにふかくたのみ奉るといしを返しけるそれより女房ともあつ
めてせんぎするに誰としてしりたるものもなしゆめく心当の事なし
とみな一同に申きる此うへはと姥をして姫に (六ウ) さまくとはせ
ければはつかしなからかたるへし去年八月十七夜こよのふ月見して更
るまであそひ何れもともに閨に入ことさら草臥てこゝろよくね入し夢
に其とのほと十七か八か貞顔美麗の若原のねまの障子をすこしあ
けて年ふれと見る目はかりの玉手箱とよみけるをおそろしき (七オ)



第九図



第十図

挿絵第九図 (七ウ)
挿絵第十図 (八オ)
ことにおもひながら君ならす
してたれかしのへきとこたへ
ければ外なく打ゑみてまくら
もとについ来りつれなくも我
をすてたまふ物哉同し光りの
雲のうへいつこもすみ家なり
ぬるに今そ恨はつきゆみの
二世かけてとうちくとき給へ
は我もこゝろはいわ木ならず
せんかたなくともないて夜
す (八ウ) がのものがたり誠
に初てならぬよそをひにて暁のなごりもいとふかくなみたの袖を引切
てかへり給ふと夢に見しより此かた過し夜に至るまで二とせのあいた
夜ことに夢路を通ひ給ひまことにむつまじき事うつゝの契りも是には
過ましと語り捨さしうつむき給へはうはも肝をけしさてくふしきな
る事 (九オ) 此うへはいよく御くわいにんにうたかひなしと奥田夫
婦へ有のまゝに語りければ夫婦弥腹を立かゝるためしなき申事ちかき
比寛なし偽を申ならはあしく沙汰すへしとしかりければうはもせん
かたなくかさねてかくと申桂の姫は聞たまひなみたなかししか成むく
いにやかゝるうらめしきありさま住てうき世もよし (九ウ) なしよし
やそれほとおやたちのいつはりものと思すなら是を御目につかけよとて

神の牛王^{ごおう}をとりよせおそろしき請文書で渡さる、夫婦はこれを見たまひて此上はうたがひなし前代未聞の事ながらふかきおもひのひとり姫命にかへておもはくの勘当をゆるして能にいたわり給ふほとなく月の数くれは産屋^{うぶ}（十オ）をかざりうつし置けふか明日やとまたれしに当^{あたり}の月も過八月十八日の曙^{あけぼの}にたやすく御産^{さん}ありければいつれもよろこひ給ひけるとりあげば、か折角^{せうかく}にかせきしかれとかつて出生の御子はなく手まりの程なる卵^{たまご}三つ生給ふば、も大きにおとろきなからは是を出す人々肝^{きも}を消しさりとはふしぎなる事哉と魂（十ウ）もやとかんしけるされとも規式^{ぎしき}は殊^{こと}にねんころに悦を重ね給ひて其卵を母の桂をとりて桂卵と名を付深く納めておき給ふ日々に色清らかに丸く成て見



第十一図

事なる事玉にまされり何希代の物なり是を一つは観音の申子なればとて宝蔵^{ほうぞう}に納め又一つは姫のたからにと一つは家の宝とてふかく重宝せられける（十一オ）

挿絵第十一図（十一ウ）

挿絵第十二図（十二オ）

ためしなき事なり此姫ほとなくたゞ人ならぬ御位よりめされ桂の前と申て御寵愛^{てうあい}日々に威勢^{いせい}もかさなりて玉の輿^こにのられけるとや不審なりけるこ



第十二図

と実にく実正也く

蜜漬の人和氣中終（十二ウ）

〔解題〕

一 書名について

底本には原題簽がなく、それぞれ表記の異なる四つの書名「蜜漬の一曲^{きょく}」（序文中）、「密告の人和氣」（巻上・尾題）、「みつ漬の人和氣」（巻中・目録題）、「蜜漬の人和氣」（同・尾題）が確認できる。本稿においては柱題に「蜜」と刻されていることを考慮して、序文中に記される「蜜漬の一曲（みつづけのいっきょく）」を便宜上書名として採用したが、野間氏（備考参照）掲出の書名も参考として併記した。

序文や本文の内容を勘案すると、書名には市井の色恋沙汰を素材とする巧みな諸分や面白い内輪話というような意が込められているようである。その意味では「密告の人和氣」が本書の性格を端的に言い表しているとも言えようが、「密告（みつづけ）」の内容が男女の「うま（甘）い」話でもあることから、「みつづけ」の音に引っかけ「蜜漬（みつづけ）」としたものであろう。また「一曲」の「曲」には「きょく」とルビが振られるものの、「曲（わげ）」と「和氣（わけ）」が利かされていよう。

二 作者について

底本に使用した唯一の現存本上・中二巻において、署名等の作者を

特定すべき記載は認められないが、柳亭種彦の手記とされる『好色本目録』（『新群書類従 第七』第一書房、昭51）には、本書に関する注目すべき記事が二箇所において見出される。

恋の中宿

外題如斯、うちに『身継の人和氣』また一冊には『身継』につくる、三冊を綴分け四冊。

男色、女色打交て話三條あり、更に面白からず、作者一慰軒、江戸板、元禄始めなるべし、画に両国の花火踊りの船あり。

前にあり

恋の中宿 絵入
半紙本 三冊を四冊に綴分たり。

うちには『身継の人和氣』また『実情五人和氣』など書てあり、男色、女色の話三つあり、作者一慰軒、江戸板なり、さまで面白からず、年号はなし、貞享か又は元禄の初めの印本なるべし。

右の記事を整理すると、種彦披見本の書誌的特徴は次のようになるうか。

書型 半紙本、三卷四冊。

外題 「恋の中宿」。

内題 「身継の人和氣」「身継」「実情五人和氣」。

構成 各卷三章一話仕立て（話三條）で、計三卷三話（話三つ）。

内容は男色、女色の話。

挿絵 あり。挿絵の中に両国の花火踊りの船が描かれたものがある。

作者 一慰軒。

刊記 なし。ただし、貞享か元禄の初め頃の印本で江戸板。

「両国の花火踊りの船」の挿絵は巻上にあり、構成や本文内容に関しても現存本で確認できるものもあるが、外題・内題や作者については確認することができない。現在未詳の下巻（種彦によれば二冊仕立て）にそれらの事実が認められる可能性は否定できないものの、現存本が種彦披見本であった確証はなく、種彦披見本が現存本の改題・改竄本であることや（もちろんその逆の場合もあり得る）、また両者ともが初印本等の改題・改竄本である可能性も捨て切れない。したがって、作者「一慰軒」なる者が初印本当初からの作者であったかは不明とし言い得ず、種彦披見本にはそうした記載が残されていたとする他はなからう。

一慰軒の著作とされるものは、管見の限りでは本書以外に確認することができず、その人物についても未詳である。ただし、後述するように本書の設定や内容が江戸の風俗に取材したものであり、ある程度の歌学的知識や『下谷桂おとこ』（貞享元年三月刊）を意識した趣向も窺えることなどから、貞享・元禄頃の江戸の俳諧師、地本屋関係者の手になるものと予想される。

三 本書の内容構成

かつて本稿の底本に使用した巻上を所蔵されていた尾崎久弥氏は本書の内容構成について次のように述べられた（前掲書）。

更に委しく本の体裁をいふと、……此本の目録は、三巻分の目録を載せてゐるかと思はれる。即ち此巻の目録第一より第三、その第一がこれであつて、中巻は第二、下巻は第三の如く思はれる。第二丁表の本文は、第一とも何とも断らずして、第一行より直ちに本文。序の「おかしき咄しをあつめ」ともある如く、此本三巻、「うまひ事の訳」をそれぐ書き集めたもの、此巻その第一であらう。

此上巻一冊、内容は、ある約婚しあつた侍の倅と姫とが、或る座頭の才覚で、両国に船を浮べて相逢ふ作である。時は夏。

尾崎氏は巻上の目録に記される第一から第三までの章題を本書三巻上・中・下各巻の目録と推定された。しかし、本文中には体裁上の章立ては見られないものの、巻上の目録三題は同巻一冊の内容と一致しており、それらは巻上一巻の章題と見なすべきものである。事実、巻中には独自の目録三題が立てられ、内容上も同巻一冊の章題としてふさわしいものとなっている。

こうした現存本巻上・中の内容構成、すなわち各巻三章仕立てで一話完結という状況と先の『好色本目録』の記事を考え合わせると、本書は各巻三章一話、全三巻九章三話で構成され、下巻を二冊に分冊し

た四冊仕立て、もしくは当初は三巻三冊であつたものが後にそのような四冊仕立てに改装された可能性が窺えよう。

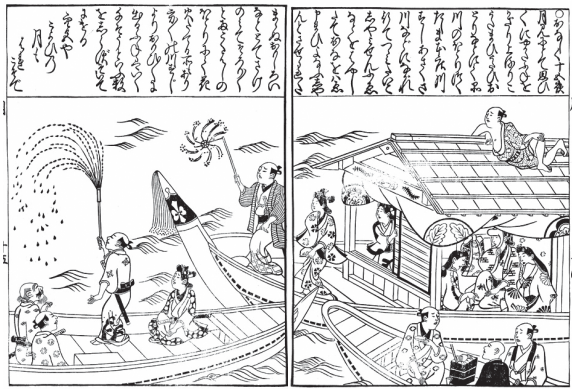
四 刊行年代について

先に見たように『好色本目録』では、刊行年代について貞享か元禄初めと推測されるものの、その根拠は示されていない。ただし、本書の刊行年代については推測すべき手掛かりがいくつか確認できる。

まず第一に挙げるべきはその挿絵についてである。一見してそれが菱川師宣風であることは了解されようが、尾崎氏は画者を師宣と推定し、特に巻上「九ウ・十オ」の挿絵について次のように述べられた。

此の図、師宣画絵本元禄四年版『月次あそび』と酷似してゐる。仕掛花火とはしけ、屋根船のへ先、波の描写、屋根の船頭など、凡て彼此逆の形ではあるが、全然同一。師宣との推定は、これからも確かである。

「全然同一」とまで言い切れるかは別としても、氏による『月次のあそび』との類似性の指摘は傾聴すべきである。『月次のあそび』には八月十五夜の月見の風俗として花火に興ずる客とともに遊山船が描かれ、次のような頭書が記される（句読点や清濁を私に付す。以下同じ）。

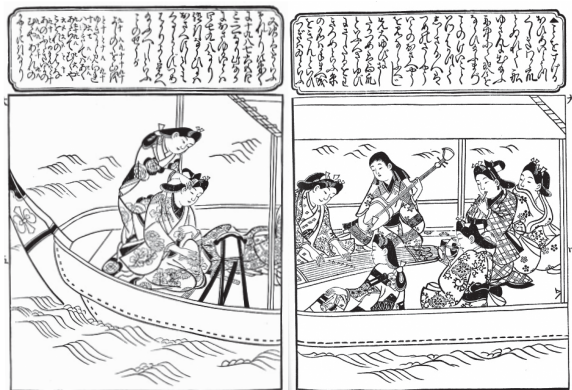


月次のあそび

○おなじく十五夜月見にとて思ひくにかたぶねをかざり、上るり、こうた、まひ、うたひ、おどりなどにて、品川のほとり、つくだじま、本庄川すじ、あさくさ川などにながれ行て、つゝみ、たいこ、しやみせん、ふゑなどをはやしたて、おなをばゑ申まひよ、なふしやんとさせられ、たまらぬ、おもしろいなどとして、さけのみてそりくくと両ごくばしのほとりにて、火花た

てる所もあり。方くの川すじよりおもひくに出るふねは、いく千そうといふ数をしらずぞいでにける。空色やこよひの月もはれこそで

季節は一月ほどずれるものの、本書と『月次のあそび』には両国橋辺りの踊り船の様子が同様に記されていることが確認できる。さらに師宣画の『やまとの大寄』には川船に同船して琴・三味線などに興じる姫と若衆が描かれ、以下の頭書が付されている。



やまとの大寄

▲ことをすけるおひめ、いとうつくしきわか衆とぬれて船ゆさんに出給ふ。舟中にて琴をならひ給ふ。……

船中で密会しながら琴に興じる姫と若衆という設定も本書巻上と共通することが窺え、師宣絵本との親近性はここでも確認できよう。

『月次のあそび』は尾崎氏が言及される元禄四年刊本（元禄四年未五月吉日／日本

絵師／菱河吉兵衛師宣／大伝馬町三丁目／鱗形屋開板）が広く知られるが、今日ではそれが延宝八年刊の『年中行事之図』（原題名は未詳。「延宝八申歳七月吉日／大和絵師菱川師宣／柏屋与市開板」）の再刻本であることが判明している。^③ また『やまとの大寄』も挿絵の一部に「天和二年七月朔日」と記される「大伝馬三丁目／鱗形屋開板」本が知られるが、『好色本目録』には次のように紹介されている（なお、国文学研究資料館蔵写本『春画好色本目録』により、『新群書類従』本の□の箇所を補った）。

大和のおほよせ 大本一冊 天和三年月日

江戸堺町物の本屋 柏屋与市板

春^⑤ならぬ好色の絵本、頭書に歌などあり、序跋ありて、文中に菱川画と見えたり。

柏屋与市版は現存が確認できないものの、この記事から現在では柏屋版が初版であったことが推測されている^④。

これらの師宣絵本の影響が本書に窺えることを考え合わせると、本書の成立・刊年はおおよそ貞享から元禄の初め頃と推測されるところに、その出版における、柏屋もしくは鱗形屋の関与の可能性も浮上しよう^⑤。

さらに本書の出版に関し、『下谷桂おとこ』との関係に留意すべき点がある。『下谷桂おとこ』は中本巻上・中・下三卷三冊、刊記は「貞享元三月中旬 松会開板」とあり、江戸版浮世草子の嚆矢と目されるものだが、『蜜漬の一曲』の巻中には娘の誕生に際し、その名「桂の姫」が「かつら男」をなぞらえたものであり、母親が「月を見」て授かった娘だからという理由が示される。

奥田手を打、「扱^{のき}も望^{もち}は違^{ちが}たり。しかれ共末繁昌^{すえはじやう}の姫、いよゝめでたし」と悦の盃を廻し、月を見たるなればとて、かつら男をなぞらへて桂^{かつら}の姫と名を付、

「かつら男」は「月」の縁語として一般的ではあるが、当該箇所は『下

谷桂おとこ』を意識した記述であったことが予想される。『下谷桂おとこ』は、先祖代々仙洞に仕える公家桂原の家系にありながら今は鎌倉に住まいする主人公桂権八が上野の花見で娘おしゅんを見初め、男色のエピソードも交えた紆余曲折の後、二人はめでたく結ばれるという好色物であるが、その物語の最後は次のように締め括られる^⑥。

ほどなく年もあけ、れば、正月^{ひつぎ}のことぶきにぎやしき悦びのをりから、さる大名の内にしるよし有て、権八身のうゑめでたくかたづきぬ。……そのとしやん事なき男子^{なんし}一人まうけたり。それよりうちづき、をんあひの中に三人の子ありて、かくてときめかしく、此ときまでさかへ侍りぬ。今はとしもふり行ど、過ぬる此事をかしさにもらし侍りぬ。あひかまへて人にいひ出給ふべからずとかたられしなり。

本篇には取り立てて「月」がモチーフとして関与するところはなく、「桂おとこ」は権八の姓に由来する命名であろうが、権八は最終的には大名に出仕して出世を遂げ、三人の男子を設けることになり、卵三つを出産し、高貴な方への輿入れを果たす「桂の姫」と好一對をなす。こうしたことから本書が『下谷桂おとこ』を意識したものであった可能性が窺えようが、そのことは本書の刊行がこれまで見てきたように貞享・元禄初め頃と推測されることと矛盾はなく、『下谷桂おとこ』との関係性はむしろ江戸版としての時宜を得た出版であったことを予想させよう。

五 刊行事情について

これまで師宣絵本や『下谷桂おとこ』を中心に本書との関連性について述べてきたが、それらの版元に着目しながら改めて本書の成立・刊行の事情について整理してみたい。

『月次のあそび』『やまとの大吉』はいずれも初印本は柏屋与市版であることが推定され、さらに前者は元禄四年五月、後者は天和三年以降にそれぞれ鱗形屋に版權が移り、再販（再刻）される。また『下谷桂おとこ』は貞享元年三月に松会から出版されていたが、ちょうどその時、師宣の挿絵が施された江戸版『好色一代男』（貞享元年甲子曆三月上旬／日本橋南式町目川瀬石町／川崎七郎兵衛板行）が刊行される。貞享三年三月は江戸版浮世草子にとってその幕明けと言うべき画期となるが、それとほぼ歩調を合わせるかのように、江戸に「地本屋」と称する本屋が出現し、『江戸図鑑綱目』（元禄二己巳天初春／書林／江戸／相模屋太兵衛）に初めて松会・三四郎・山本九左衛門・鱗形屋三左衛門・鶴屋喜右衛門・山形屋市郎右衛門の五店が掲載される。

本書との関係性が窺える松会・鱗形屋がいずれも元禄初頭に地本屋として登場していることは興味深いが、松会は江戸版浮世草子に先鞭を付け、鱗形屋は天和期頃から急速に師宣絵本の出版に傾斜するようになる。⁽⁸⁾ そうした趨勢にあった当時の江戸の出版界において、本書は貞享・元禄初め頃の地本屋の動向をある意味象徴的に体现した好色本浮世草子と位置付けることができそうである。

注

- (1) 図版とともに『新編稀書複製会叢書 第34巻』（臨川書店、平3）による。なお、後述する『年中行事之図』（『菱川師宣』展図録）千葉市美術館、平12）にも該当箇所は存在する。
- (2) 注（1）による。
- (3) 佐藤悟氏「『菱川月次のあそび』初板本の発見と報告」（『書誌学月報』第25号、昭61・3）。
- (4) 注（1）『図録』解説。
- (5) 注（3）佐藤氏は、貞享末年には柏屋が廃業し、貞享年間に板株をすべて鱗形屋へ譲渡した可能性について言及されている。
- (6) 『石川流宣画作品集 上巻』（古典文庫、平7）。
- (7) 『やまとの大吉』鱗形屋版が柏屋版の求版本か再刻本であるかは不明。
- (8) 柏崎順子氏「鱗形屋」（『言語文化』47、平22・12）。

（二〇一八年十月一日受理）
（ふじわら ひでき 文学部日本・中国文学科教授）

本研究はJSPS科研費17K02458の助成を受けたものです。

